ミャンマーに日本式技能伝承

ものつくり大学で指導者研修

ミャンマーに日本式の建築技能を伝える――。「RC型枠・鉄筋」「左官・レンガ」「建築大工」の3コースで、3人のミャンマー人講師育成の研修が9月5日から16日までものつくり大学で実施された。技能研修指導者の研修には3人のほか、ミャンマー国の労働省と技能訓練センター副校長も研修に参加している。このプロジェクトは国際協力機構（JICA）の「ミャンマー国建築技能訓練校設立運営及び技能認証制度の普及・実証事業」。業務受託事業者のKNDコーポレーション（東京都北区、神田充社長）が訓練校運営監理、ものつくり大学は訓練校運営企画コンサルタントと教育指導する。

2016年12月から19年7月31日の契約期間に、建築技能者の育成と資格認証業務を行う。研修はマネジメントコースが1回（定員40人、2カ月）でことし3月に終了している。技能者養成コースは「RC型枠・鉄筋」「左官・レンガ」「建築大工」の3コース。受講生の定員は各コースとも40人で、4カ月にわたる座学と実技を4回実施する。最大480人の技能者を養成し、ミャンマーのゼネコンなどに供給する。ミャンマーに進出する日系ゼネコンにとってもメリットになりそうだ。

マネジメントコースと第1回技能研修は日本人講師が務め、1回目の技能研修が終了したことから今回、両コースを終了した受講生の中から技能研修3コースのミャンマー人講師を育成することを目的に3人を選考し、技能研修指導者の研修を行った。11月2日開校式を行う第2回技能研修からは彼らが教えることになる。

ミャンマー国労働省によると、電気や自動車整備、溶接などの技能訓練は行ってきたが、労働省が建設関連の研修を行うのは初めてという。同国建設省の下にある訓練センターと連携しながら、事業終了後も継続していきたいとする。

三原斉ものつくり大学教授は事業について「技能者のレベルを上げることに加え、日系企業が日本水準の技能者を使って仕事ができる」ことをメリットとしてあげる。

左官コースの指導者を目指すジン・マー・ウインさんは「考え方、やり方、道具、使用方法も違う」と話し、レンガにモルタルを投げつけて、それを削り取るミャンマーのやり方と、コテを使い塗り壁を造る日本式の違いを指摘する

ミャンマーで制作した日本のコテ（左）とミャンマーのコテ

「RC型枠・鉄筋」「左官・レンガ」「建築大工」の3コースを実施

も、「品質や形が整いレンガが良くなれば、日本式が必要になる」と指摘する。さらに、「自分のできることを共有していきたい。現場に戻ってしまえば、学んだ技術を止めてしまう。この研修が4回で終わるのであれば、小さくても自分で学校を開いて教えていきたい」と話した。

また、日本式の左官の普及には道具の現地生産が欠かせないことから、研修ではミャンマーにある材料でコテを制作し、使っているという。

型枠・鉄筋のウ・アウン・コ・ラッツ氏は「技術面でははるかに上で、難しい部分はあるが、基礎的なことは同じだと思う。もっと知りたいと思うことを先生方にアドバイスや教えてもらいながらやっていきたい」と話す。

大工コースのウ・ミン・ミン・コ・チ氏は「基本から、1から住宅ができるまでを学びたい。そして、1棟の家を自分で建ててみたい」と意気込む。

RC型枠・鉄筋

左官・レンガ

建築大工コース